

科(3年課程100人)単科の短期大学として、平成6年4月に開学し、その後、平成9年度からは、地域看護学専攻(45人)及び助産学専攻(15人)からなる専攻科を開設し、現在に至っているところである。

本学の開学に伴い、伝統のある新潟県立中央病院附属看護専門学校と新潟県立公衆衛生看護学校は、それぞれの任務を終え、本学が発展的に継承したことになった。

教育の基本的な考えは、看護の対象は人間であり、生命に深く関わることから、倫理的に自らを深く考え理解するための人間教育や高度化する医療技術に対応していくための、理論と実践能力を養成する、臨床実習教育などの充実に努めている。

また一般県民を対象にした健康と看護に関する知識の普及と県民の看護水準の向上に寄与するため、公開講座の開催、図書館の開放、生涯学習推進機関への支援等大学教育機能を広く地域社会に提供してきたところである。

本報告書は、本学の開学から平成11年度までの6年間の経過と現状、課題を総括し、自己点検・評価を行うため、平成9年12月に自己点検・評価委員会を設置し、慎重な審議を重ね取りまとめたものである。

本学は、地域文化に根ざした看護科学の考究を教育・研究の使命とし、より質の高い看護人材の養育を行うため、平成14年4月開学予定で4年制の看護大学へ発展改組することとしているが、今回の自己点検・評価で得られたことが、将来の教育、研究や大学運営管理に有益なものとなるものと思っている。

また今回の自己点検・評価は、第三者評価システムの導入は行っていないことから、より透明性、客観性の高い大学運営をするためにも、自己点検の継続とともに、学外者による第三者評価システムの導入がこれからの検討課題である。

本学の今後の展望のため、関係各位の忌憚のないご批判、ご助言をお願いしたい。

(2001年3月発行 自己点検・評価報告書—現状と課題— から)

平成13年度 戴帽式 式辞

(故)学長 斎藤 秀 晃

薫風さわやかな季節となった本日ここに、戴帽式を迎えられた2年生108名の皆さん、誠におめでとうございます。

また、お忙しい中、多くの御来賓並びに御家族の皆様から御参列していただき、心温まる御祝辞を賜りますことを、戴帽生と教職員を代表して御礼を申し上げます。

戴帽式は、看護婦・看護師を職業として選んだ、戴帽生の皆さん方の自覚を促す区切りとなる儀式であります。

これは、ナイチンゲールがクリミア戦争の野戦病院に赴いて、夜はローソクに火をともし、傷病

の兵士たちのベッドを見回るなど、不眠不休の献身と自己犠牲において看病に当たった、その博愛の精神を受け継いで欲しいとの願いを込めて行っているものであります。

ナイチンゲールは、「看護とは、新鮮な空気、光、暖かさ、清潔さ、静かさを適当に保ち、食事を適切に選択し、管理すること、こういったことの全てを、患者の生命力を少しも犠牲にすることなく整えること」と述べていますが、看護とは、その言葉の示すとおり、み（看）て、まも（護）るということであります。

すなわち、看護婦・看護師の使命は、看護を受ける人が自分の健康を自ら守っていくための十分な知力、体力を持っているか、そのために何が必要なかを観察、判断し、その足りないものを補いつつ、個人やその家族が自立して日常生活活動ができるよう援助するということです。

また、看護に当たるといことは、確かな看護の知識と技術を習得するとともに、看護の対象となる人を理解し、信頼関係が成り立つよう努力しなければならない大変難しく、かつ責任の重い職業であるということ、これまでの勉学で充分理解していると思いますが、看護を待っておられる方々のお世話ができるという、社会的な貢献度の高い、やりがいのある職業ですので、これに従事することの誇りと情熱を持って、看護の基礎知識の研磨に励んでいただくことを期待しております。

さて本日ご出席いただきました、臨床実習施設の皆様には、忙しい日常業務に加え、本年もまた大勢の学生に対しての実習指導をお願いすることになりますが、21世紀の医療看護を担う、戴帽生に、何卒宜しくご指導をお願い申し上げます。

最後に、これから2年間、ハードな勉学と実習が続きますが、看護専門職である、看護婦・看護師としての自覚と知識・技術を一日も早く身に付けられ、国家試験に合格し、医療看護の世界で活躍されることを祈り、式辞といたします。

平成13年5月7日

新潟県立看護短期大学 学長 齋藤秀晃